

第64回近畿中学校総合体育大会陸上競技

(8/6・7 奈良・鴻ノ池)RESULTS

<男子の部>

四種競技 神原 大地 2548点 2位

110mYH 15秒07 (+0.4) 841点 砲丸投 11m48 575点

走高跳 1m60 464点 400m 53秒33 668点

<女子の部>

共通4×100mR (亀澤舞・山本光菜里・西尾茉帆・畑田星来) 50秒20

<決勝> (亀澤舞・山本光菜里・西尾茉帆・畑田星来) 50秒35 7位

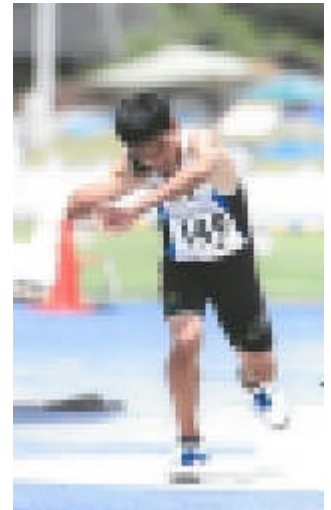
- 大会前日の昼過ぎに神原と堀本を連れて、奈良鴻ノ池陸上競技場に到着。2011年、48秒台の女子リレーチームを引き連れて、日本一を目指した2011年奈良全中が開催されたブルトラックの競技場である。大会初日の四種競技に出場する神原は慌ただしく調整練習に入る。本競技場でハードルのアプローチ練習、サークルに入っただけの砲丸投げの練習、走り高跳びピットに立ってイメージ練習、そして最後に400mの入りの練習をスタブロを使って1本。初めての近畿の大舞台でやや硬くなった印象があり、いつもの躍動感がなかったというのが正直な印象であった。無理もない。初めての大会。2週間後に北海道全中を控える神原にとっては、大きな経験となることは明白であった。大会プログラムのランキング表を見ると、神原の自己記録2644点は1位。プレッシャーがかかるのは当然である。
- 朝の5時に起床。宿舎近くのコンビニに買い物がてらに散歩。7時20分には競技場に到着。簡単なアップを済ませて、最初に向かったのは投擲練習場である。神原は四種競技の選手には珍しく、フィールド種目をどちらかと言うと苦手になっている選手である。朝一番の砲丸投げの投げこみは絶対条件で、自分の教え子でもある天王中学校の松原先生にアドバイスをもらいながらの練習となった。この場面でも大阪中学選手権のときの



ように、思い切った投擲ができていない印象があった。30分ほど投げこみをしたあとに、今度は本競技場にもどって、ハードルのアプローチ練習に取り組む。練習用の旧式の重量感あふれるハードルであったために、いつもの思い切りの良さが見られない。何度も繰り返すことでブレーキング動作がかかるイメージが大きくなるのを嫌って、ほんの数本跳んだところでストップをかけた。ハードルのセンスは抜群の選手なので、心配ないと判断したのである。

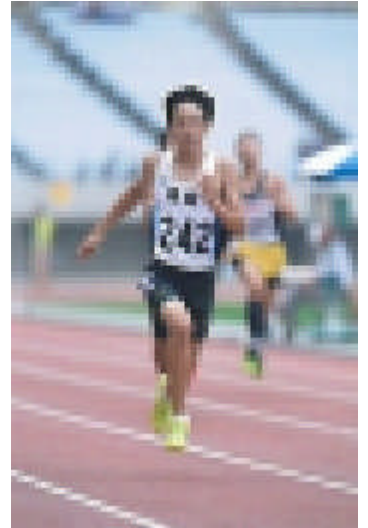
- 10時50分競技開始。共通男子110mYH、3組4レーンに神原が登場する。ハードルは神原のもっとも得意とする種目で、このハードル単独種目の参加標準記録（15秒00）突破目前の15秒08が彼のベストタイムとなる。近畿2府4県から集まった18名の代表選手で一番小柄な神原であるが、高さ91.4cmのハードル10台を苦もなく越えていくことができる素晴らしいスキルを兼ね備えている。スターターのピストルの閃光（せんこう）で、彼の夢舞台の幕が降りた。ハードルのアプローチに注目した。ややブレーキがかかったように見えたが、そこから修正して5台目あたりからぐんぐん加速があがるいつものイメージで走り切った。15秒07。追い風0.4m。わずか100分の1秒であるが自己ベスト。その数字よりも、いつもどおり得意のハードルで841点をゲットして、好発進できたことに安堵した。
- レースが終わってすぐに投擲練習場に直行する。砲丸投げで自己ベストの12m05を目指したい。この種目で600点を超えると優勝が見えてくると考えていた。ところが、神原の投擲を見て、調子がよくないことがすぐにわかった。最後まで突くことができずに、一番大切なリリースの場面で力を逃しているように見えた。11mを超えるのがやっとである。松原先生にいくつかのアドバイスをもらいながら、慌ただしく競技者招集場所へ連れて行った。覚悟はしていたものの、酷暑の中過密日程である。

12時20分、男子四種競技砲丸投げ競技開始。1投目が10m71、2投目は10m95とわずかにロング。予想していたとおり苦戦している。ファウルを怖れず、とにかく最後まで砲丸を突ききりたい。祈るように3投目の投擲を見つめた。リリースして、砲丸が放物線の頂点を描く頃、明らかに記録が伸びたことがわかった。標示板の数字は『11m48』、よくここまで何とかまとめたというのが率直な感想であった。この種目で575点。2種目を終わって、神原がトップであった。

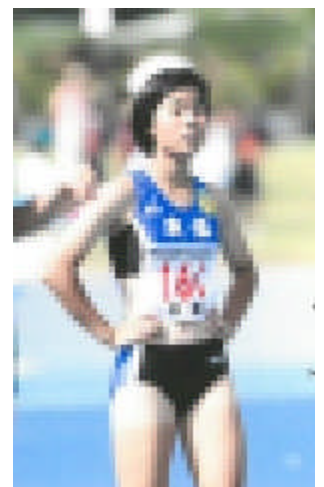


- 14時20分、男子四種競技走り高跳び競技開始。彼の自己ベストは1m70。ただし、この種目はやっかいである。例えば、110mYHでは100分の1秒の差が得点で言えば2点の差となる。ところが、この走り高跳びは1m75までは5cm刻み（この高さを超えると3cm刻み）でバーがあがっていく申し合わせとなっている。この5cmがおおよそ40点の差となる。1m75までの記録の選手にとっては40点刻みとなってしまう。1回の成功が得点を大きく左右してしまうのだ。神原は1m60まで順調にクリア。バーは彼の身長とあまり変わらない1m65に上がる。1回目の跳躍。足があわずに、バーの直前で取りやめてしまった。まだ時間が残っていたのでやり直しとなったが、このやり直しも失敗。この高さクリアする重大性は彼も十分にわかっていたはず。ただし、守りに入って攻めきれなかったのではないかと。2回目も失敗。そして、最後の

3回目。胸の前で両手を組んで祈るしかなかった。意を決して助走を始める。スピードの乗った内傾から踏み切り。彼の体が大きく宙に浮く。やった！と思わず立ち上がってしまった。クリアしたと思った瞬間、彼のふくらはぎがわずかにバーをかすり、やや遅れてバーが落下。審判の赤旗があがった。1 m 6 0。得点は4 6 4点。3種目を終わって2位になってしまった。

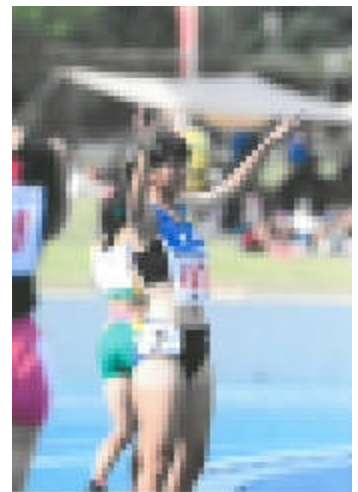


- この日の最終種目となる。16時35分開始、共通男子四種競技400m。3種目を終わった時点で、この400mの番組編成が決まる。神原は3種目終了時点で記録上位者6名が集まる3組6レーン。走り高跳びで1 m 7 8を跳んで610点を獲得して1位に躍り出た兵庫の有野北の選手が3レーン。その差は58点。「守りに入るな！前半から攻めのレースをしろ!!」と、アドバイス。とにかく集中することだ。スターターのピストルが鳴った。本人へのアドバイスとは別に、3レーンの選手と神原の走りの差に注目した。この400mで大きく差をあげれば、十分逆転優勝も可能になるからだ。彼のベストタイムは通信大会で出した52秒61。バックストレートの走りにわずかに迷いが見えた。第4コーナーをまわって7レーンの選手と接戦。わずかに100分の1秒及ばず53秒33の2着。668点。トップの有野北の選手が53秒51で660点。4種目トータルで2548点で2位。優勝したのは有野北の選手で2598点、その差は50点であった。
- この日最後の表彰式がおこなわれた。神原は決して笑みを浮かべることなく、悔しさを噛みしめていた。勝負は北海道全中である。彼の持ち記録2644点は、日本中学ランキング4位である。8位入賞は最低限の目標である。日本のテッペンに少しでも近づくために、堂々と大勝負にのぞきたい。この近畿大会で学んだことを活かして、北の大地で夢輝く日を楽しみにしたい。
- 大会2日目。前日の昼過ぎに現地入りした共通女子リレーメンバーも朝5時に起床。7時20分頃には競技場入りした。プログラムのランキング表を見ると、東雲の49秒51は8位。48秒台の3チーム、小野（兵庫）咲くやこの花（大阪）南郷（滋賀）は全中の優勝候補でもある。49秒81の河南までの9チームが49秒台。イメージしていたものの、レベルの高さに改めて驚かされた。彼女らには「何としても決勝に行って、近畿の強豪校と勝負したい」という強い決意があった。大阪中学校選手権の決勝で咲くやこの花に敗れて全国大会出場の夢が叶わなかったそのときから、近畿大会で49秒51の記録を更新して表彰台を目指すという目標で今日まで頑張ってきたのだ。

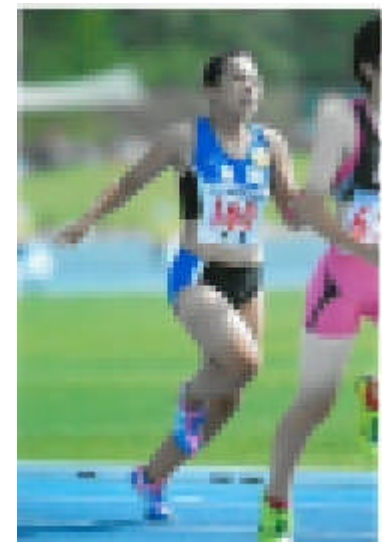


10時20分競技開始、共通女子4×100mR 予選。18チームが3組に分かれて、各組の1着と、2着以降の記録上位5チームが決勝進出となる。各組は記録上位チームがシードされた上に、2府4県の代表チームが各組に配置されている。東雲は3組6レーン。東雲より上位の記録を有するのが全中で連覇を狙うリレー強豪校、5レーン滋賀の南郷、4レーン兵庫の青雲も49秒17と手強い相手となる。「3着になれば決勝進出はありえない」と、直感した。第1走者の亀澤はいつものように落ち着いてスタプロをセットしている。お決まりの東雲の大声援はないが、予選からピーンと張り詰めた緊張感が漂った。スターターのピストルで6人の走者がきれいにスタート。亀澤がきれいなピッチで曲走路を駆け抜けていく。第2走者の山本光菜里にきれいにバトンが渡り、バックストレートを疾走する。内側のレーンの南郷の第2走者と遜色のない見事な走りである。第3走者の西尾もスピードに乗った状態でバトンを受け取る。勝負どころの第2曲走路。予想どおり南郷が前に出たのがわかった。西尾も自分の走りを崩さない。第4コーナーの最後の継走。南郷が出た。そして続いて出たのが東雲。畑田が懸命に南郷を追う。続いて4レーンの青雲が東雲を追う。「逃げろ、逃げろ！逃げろ!!星来(せら)!!!」と何度も心の中で叫んでいた。東雲は2着でフィニッシュ。正式計時の発表までの時間がとても長く感じられた。1着 南郷49秒11、2着 東雲 50秒20、3着 青雲 50秒47…。1組3着の河南が50秒21、わずか100分の1秒の僅差で明暗が分かれたことになる。プラスの最後の5番目、全体で8番目の記録で東雲が決勝進出、河南が9番目の記録で予選敗退となったのである。

- 「バトンとたすきに終わりはない」いつも選手たちに言い続けている言葉である。東雲には共通リレーの歴史がある。この11年間で2005年、06年、07年、10年、11年、12年、そして今回の15年と7回近畿大会に出場している。6回の内、優勝1回、準優勝2回、さらに入賞2回。全国大会にも4回出場という伝統があるのだ。「東雲ブルーのセパレートユニフォームでバトンを持てば神がかり的な力を発揮する」ことを選手たちは信じているのかも知れない。毎年のように、自分たちの夢を賭けて大勝負で躍動する姿を見て、後輩たちは「先輩たちに負けないようなリレーチームを！」という思いで、必死で練習する。「WE CAN DO IT (きっとやれるはずだ)」を合い言葉に自分たちの夢輝く日信じ切っているのだ。この無形の力こそ、東雲リレーチームの最大の力になっていることは間違いない。今回、リレーチームの補欠で連れて来たのが2年生の小澤と畠山。この2人が新チームの柱となって、2016年度シーズンのチームを作り上げてくれるはずだ。思えば、リレメンの補欠から大きく成長した選手がたくさんいる。田中美調、西尾香穂、村上瑞季…etc。1本のバトンからたくさんの物語が生まれているのだ。



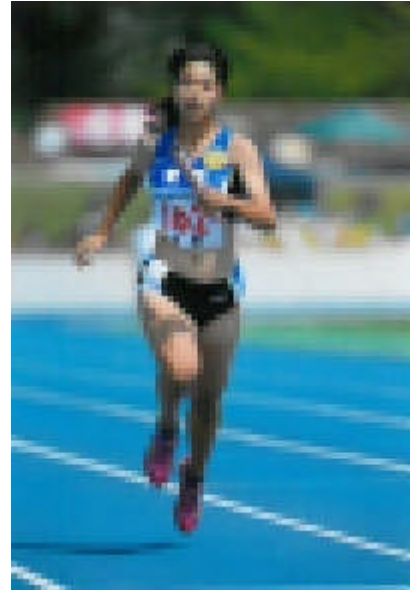
○ 共通女子リレーメンバーが帰って来た。まずは最低目標であった決勝進出を果たせたことで安堵の表情を見せた。バトンワークには確かな技術があるチームである。つい2週間前に49秒51で走ったチームなのだ。あとは個人の走りに磨きをかけて、大勝負のその時を静かに、そして気持ち的には積極果敢に迎えたい。暑さを避けて昼間は大阪ベンチでアイシングしながらのリラックスした時間を過ごす。1時40分頃にベンチを後にして決勝に向けてのアップを開始した。もちろん小澤も畠山もいっしょである。日陰になっている軒下のタータンで体幹補強とストレッチ、スピードプレイを済ませて、炎天下のサブトラックに向かった。ここでは個人でのショートスプリント、そして速いバトンフロートに絞る調整となった。南郷が近くで足合わせを繰り返す。予選でバトンが乱れた咲くやこの花も奥のコーナーで入念に足合わせを繰り返していた。リレー種目がファイナル種目となるために、あれほどにぎやかだったサブトラックにはリレーのファイナルチームしかいない。この風景を見て、2年生の2人は何を感じ取ってくれただろうか。やがて、競技者招集場所へ。リレーチームに最後のアドバイスを送ると、あとは4人の選手だけでミーティング。円陣を作って大きな声を出してハイタッチ。4人は気合い十分で薄暗い招集場所へ消えていった。そのあとのコールの様子も近くで2人に見ておくように指示した。近畿チャンピオンチームを目指して8チームが勢揃いした。大阪、兵庫、滋賀から各2チーム、奈良、そして京都から各1チーム。全中の優勝チームを占う大事な前哨戦ともなる。この張り詰めた雰囲気をもノともしない気合い十分の32人の選手たち。戦いはすでに始まっていると感じた。小澤と畠山も同じ表情をして、この光景を目に焼きつけていたに違いない。



○ 15時05分競技開始、共通女子4×100mR 決勝。大きな声で名前を呼び合う儀式が始まった。スタンドに居ても、そのやりとりがよく聞こえるくらいの気合いの入った大きな声である。高らかに音楽が鳴ってレーン紹介が始まる。「第2レーン、東雲、大阪。そのオーダーは第1走者亀澤舞さん、第2走者……」選手は名前を呼ばれると右手をあげて一礼をする。やがて、決戦の時。運命の号砲が鳴った。8人の第1走者はそれぞれの夢に向かってきれいに飛び出して行った。亀澤はスタートから気合いの入った走りを見せた。見事な先兵役である。バトンはきれいに第2走者の山本光菜里に渡る。彼女本来のダイナミックな走り、他チームのエースと堂々と渡り合うスピードで駆け抜ける。第3走者の西尾にも寸分の狂いもなく流れるようにバ

トンが渡る。ここまでノーミスのレースで西尾もきれいなピッチで走るが、他チームも強い。優勝候補の小野がここでバトンが乱れたことに気づいたが、そんなことを問題にしないスピード感あふれる走りである。第2曲走路で強豪チームが予定どおり前に出る。6レーンの畝傍がやや前、7レーンの栗津も勢いがある。追う咲くやこの花、南郷、そして小野。バトンはクライマックスの第4コーナーへ。畑田がやや遅れて飛び出して懸命に前を追う。8人のアンカーの迫力ある走りに息を呑んだ。咲くやこの花のアンカーが逆転、両手をあげて真っ先にフィニッシュ。48秒97、2位に南郷49秒25、3位に畝傍で49秒27。4位に栗津で49秒83、バトンが流れなかった小野が49秒88。ここまでが49秒台。6位に飾磨西で50秒20、7位に東雲で50秒35。ミスのない走りを見せたが、全国の頂点を狙う強豪校と戦うには、疲労が抜けきれない調整ミスがあったかもしれないが、そのことを差し引いても力不足であったことは否めない。

- 「近畿2府4県の全国大会に出場する代表チームに勝って、(3位以内の)表彰台に乗る」という目標は達成できなかった。おそらく近畿の決勝を走ったチームの中から、全国大会で優勝して日本一が生まれる可能性が高い。レベルの高い勝負となったが、彼女たちのリレーが終わったわけではない。さらには、今回の経験を活かして、東雲リレーチームのバトンは明日へ、そして夢輝く未来へとつながっていくはずだ。「夢はリレーの日本一！」この夢に真っ正直に堂々と挑んでいた歴代の先輩たちがいたからこそ、今の東雲リレーチームがあることは間違いない。今回の彼女たちは大阪大会のときに涙にくれたわけではなく、猛暑の激戦を戦い抜いたことでしばし安堵の表情を浮かべていた。まだまだやらなければならないことが、たくさんある。毎日の練習を徹底して、継続していくことでしか道は拓けない。当たり前のことであるが、陸上競技というのはそういうものだ。



夢輝け！東雲中学 しののめブルーの超特急!!